

# 日本国際理解教育学会会報

JAPAN ASSOCIATION FOR INTERNATIONAL EDUCATION NEWSLETTER

Vol. 35 2009 (平成 21 年度) No. 1 平成 21 年 10 月 9 日 編集発行：日本国際理解教育学会事務局  
〒 161-8539 東京都新宿区中落合 4-31-1 目白大学内 TEL：03-5996-3166 FAX：03-5996-3125  
E-mail：kokusai@mejiro.ac.jp Website：http://www.kokusai.com

## 目次

巻頭の言葉 学会長挨拶	1	学会と民博の共同研究成果	11
第19回研究大会報告	2	2008 (平成20) 年度総会報告 (事業報告・決算)	12
第19回研究大会分科会報告	3	2009 (平成21) 年度事業計画・予算	13
第19回研究大会シンポジウム報告	5	理事会 (各委員会等) 報告	14
第19回研究大会「特定課題研究」報告	6	会員だより	15
第19回研究大会参加記	7	公文国際奨学財団・海外派遣報告	18
小特集「新学習指導要領と国際理解教育」	9	お知らせ (これからの行事・イベント案内)	19
博学連携教員ワークショップ2009inみんぱく	10	事務局通信	20

## 巻頭の言葉



### 「共創型対話」による 学会活動の拡充を

日本国際理解教育学会長 多田 孝志

教育とは、未来を築く創造的な営みであり、社会変化や児童・生徒の現状を踏まえ、児童・生徒一人一人の人格の完成及び社会の形成者の育成という目的の実現を期すものでしょう。今日の教育にかかわる大きな社会変化は、「知識基盤社会 (the knowledge-based society)」の到来と言えるでしょう。

経済協力開発機構 (OECD) は「知識基盤社会」時代を担うのに必要な能力を「主要能力 (キー・コンピテンシー)」として定義付けています。OECDのいう主要能力 (キー・コンピテンシー) とは、「技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」とされています。具体的には、「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力」「多様な社会グループにおける人間関係形成能力」「自立的に行動する能力」という3つのカテゴリーにより構成されています。

人類の知には、専門的知見を深めるタイプや、そうした専門的知見を組み合わせ、あるいは統合し、新たな知見や価値等を生み出すタイプがあるように思われます。「知識基盤社会」で重視されるべき知とは、OECDのキー・コンピテンシーに示されたように明らかに後者であり、地域や地球的課題の解決に当事者意識をもち多様な他者と共に、主体的に活動す

る人間の育成を主要な目的とする本学会の希求する方向と軌を一にするとと言えるのではないのでしょうか。

多様な人々やその知見を結びつけ、統合する有用な手だては対話にあると考えます。グローバル時代の対話とは、単なる言語を運用する力にとどまりません。それは多様な他者と共に新たな知見や価値を創り出す能力、他人と創造的な関係を構築する能力、対立や争いを解決する能力などが組み合わせられた広い意味と役割をもちます。筆者は、こうした対話を共創型対話と名付けています。共創型対話は対立や亀裂を克服し、社会的な紐帯と連帯を創造・再生するための基本的技能と考えます。

競争・比較・効率重視の市場至上主義の教育への波及は、教育界を疲弊させ、格差を増大させ、自己肯定感の乏しい子ども、疲労感に苛まれる教師の多発など、深刻な問題を生起させました。いま、この状況を打破し、人々の間の連帯を重視し、「市民社会」ないし公共空間の拡充をめざす教育へと転換すべき時期を迎えているように思えてなりません。

希望ある未来を創る教育としての国際理解教育の在り方を探究していく本学会にとっての大きな課題は、新たな時代にむけて国際理解教育の理論構築と実践方法の在り方を解明し

ていくことにあります。2010年の第20回研究大会(聖心女子大学)の特定課題のテーマ「グローバル時代にシチズンシップと国際理解教育」では、こうした課題を深め、広げていく論議が期待されます。

本学会のさまざまな活動の機会に、多元的な見解、異見や批判が生かされる共創型対話が展開され、研究・実践活動が拡充され、それが、教育界の明日を希望あるものにしていくことを願っています。

## 日本国際理解教育学会第19回研究大会報告

# 国際理解教育の新たなステージを感じさせた大会

第19回研究大会実行委員長 藤原 孝章

### 3日間で280名を超えた参加者

日本国際理解教育学会第19回研究大会が、6月12日(金)午後のプレイベントを含めて、6月13日(土)・14日(日)の両日に、同志社女子大学現代社会学部(現代こども学科)を会場に開催されました。事前申込の段階では、韓国・中国からの参加者21名と通訳7名を加えて、約180名の参加者が予定されましたが、当日来場された参加者が予想以上に多く、あらかじめ用意した抄録冊子250部の残部が10部ほどしか残っておりませんでした。これに、大会運営に協力してくれた教員と学生諸君44名を加えると、280名を超える参加者を見ることがになります。プレイベントでは、平日の午後にもかかわらず70名を超える参加者がありました。会場の京田辺キャンパスは、京都、大阪、奈良からほぼ等距離にあるので、現職の先生方が参加しやすいように、地元の京田辺市の他、京都府・市、大阪府・市、奈良県・市の各教育委員会から後援をいただくことができました。

さて、今回の大会は、実ははらはらどきどきの大会でした。ご存知のように、大会開催1ヶ月を切って、あとはカウントダウンだというときに、新型インフルエンザが兵庫県、大阪府にまん延しました。多くの学校が休校になり、学会も含イベントが中止になり、修学旅行生で賑わうはずの京都や奈良でキャンセルが相次ぎました。京都市でも感染者が発生し、同志社女子大学も5月22日(金)から27日(水)までの6日間休校になりました。休校が明けて、兵庫、大阪など感染者が減り、新型インフルエンザ自体も、季節性インフルエンザに近いものであることが徐々にわかってきたのですが、本当に開催できるか、5月の下旬は心折れる心境でした。月が変わって、ようやく気持ちを入れ替えて準備にまい進することが出来たのは、学会の理事をはじめ、多くの参加者のご支援の賜物だったと思います。終わってみれば、3日間とも天候に恵まれ、前回大会を上回る参加者をお迎えすることができ、盛況のうちに終えることができました。

ここで、3日間の内容を簡単に紹介しておきます。



ヨーロッパの中世都市を思わせるキャンパス

プレイベントは、同志社女子大学に隣接するNPO法人京田辺シュタイナー学校の協力をえて、学校の理事でもある大阪府立大学の吉田敦彦

氏が、「ユネスコ・スクールとシュタイナー教育—京田辺シュタイナー学校の事例」と題して講演されました(現代こども学科主催講演会)。会場には学校の生徒さんのノートなどが展示され、参加者は学校見学をしました。ふだんはあまり公開されないのですが、大会開催の機会をとらえて学校を見学させていただいたことは、学生、会員諸氏にとっても幸運なことでした。

次に、第1日目(6月13日)には、午前中に分科会、午後に公開シンポジウム「国際理解教育と『習得・活用・参画』」に結びつくワークショップや社会参加学習がめざすもの—」が行なわれました。夕方からは近くの宿泊施設に移動し、懇親会が行なわれました。第2日目(6月14日)には、午前中に分科会、午後に特定課題研究「ことばと国際理解教育」が行なわれました。

### 新型インフルエンザに悩まされつつも 学生諸君の協力で開催運営

第19回研究大会では、自由研究の部で国内から65題目、韓国国際理解教育学会から5題目の計70題目が発表されました(申込時点では73件)。京都市内の御所に隣接する今出川キャンパスではなく、都心から離れた関西学術研究都市にある京田辺キャンパスでの開催のため、京阪神以外から来場された方にはご不便をおかけしましたが、コンパクトな校舎と教室空間の中で3日間を過ごしていただけたのではないかと考えております。

大会の準備や当日の運営には、大学の合宿施設に2日間泊まり込んでくれたゼミの学生を中心に多くの学生諸君、卒業生が手伝ってくれました。思えば昨年彼女たちをつれて富山大会に下見をかねて参加したことがはじまりです。その時のゼミの学生諸君(4回生)が中心となって、受付、司会補助、会場設営などにテキパキと動いてくれました。研究大会そのものに馴染みの薄い学部学生主体の運営に心配もしておりましたが、幸いにも多くの参加者から賞賛の言葉をいただきました。昨年11月からはじめた開催準備でしたが、当日の運営は、学科の教員(塘利枝子、上田信行教授)はじめ学生諸君の協力がなければできなすべくもありません。感謝の言葉がありません。

最後に、日本全国、そして韓国、中国からご参加頂きました国際理解教育の研究者や実践者の皆様や、本大会にご支援・ご助成をお寄せ頂きました方々に心より御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

## 第19回研究大会分科会報告

# 日中韓共同研究が科学研究費補助金を得てスタート

## 第19回研究大会実行委員会

第19回研究大会の分科会が、6月13日(土)・6月14日(日)の午前同志社女子大学現代社会学部(現代こども学科)で開催され、15分科会場で充実した発表と熱心な討論が展開されました。今年度は、自由研究発表の件数が70件(抄録冊子73件)に達するなど、前回はうまわる規模となりました。また、韓国からも5件の発表があるなど、本大会は前回に続き、国際学会となりました。

6月14日夜には、科研費による3年間の共同研究として、日中韓教材開発のためのワークショップが正式に設けられました。これは、札幌(第17回)、富山(第18回)の「日中韓教材開発」の蓄積をもとに実現したもので、今後、日韓で開催される研究大会の際に、共同研究の成果を発表し、協議するものです。

では、以下に、自由研究発表の題名と発表者を報告します。

### 研究大会分科会のプログラム

#### 第1日(6月13日)第1分科会～第7分科会

##### ■ 第1分科会 T351教室

司会：森茂 岳雄(中央大学)・北山夕華(名古屋大学留学生センター)

- (1) ESDにおけるシティズンシップ-ESDの教育目標を読み解く-  
小関 一也(常磐大学)
- (2) 国際理解教育におけるローカルシティズンシップについて  
岡崎 裕(プール学院大学)
- (3) シティズンシップ教育をめぐるアジアの動向-マレーシアの取り組みを中心として-  
手嶋 将博(文教大学)
- (4) シティズンシップ教育をめぐるヨーロッパの動向-欧州評議会とEUの取り組みについて-  
中山 あおい(大阪教育大学)
- (5) ロシアのシティズンシップ教育におけるパトリオティズム  
嶺井 明子(筑波大学)(欠席)

##### ■ 第2分科会 T353教室

司会：宇土 泰寛(相山女学園大学)・風巻 浩(神奈川県立麻生高等学校)

- (1) クジラを通して世界を見つめた総合的な学習の時間の実践  
高橋 順一(桜美林大学)・蓮見 信夫(板橋区立志村小学校)
- (2) 学校教育において“わかる”を社会参加につなげるファシリテーターの役割とその可能性-開発教育からのアプローチ  
山中 信幸(柳学園中・高等学校)
- (3) 子どもの「社会参画」の力を育てる国際理解教育のカリキュラム開発に関する研究  
藤崎 隆博(鹿児島大学大学院)(欠席)
- (4) 日本の南極領有権放棄の是非-全校参加ディベート  
鹿野 敬文(福岡県立福岡高等学校)
- (5) 「変化の可能性」を信じていることができる生徒を育てる-「人間科」を中心とした国際理解教育の実践と課題  
野中 春樹(広島なぎさ中・高等学校)

##### ■ 第3分科会 T354教室

司会：桐谷 正信(埼玉大学)・本多千明(聖トマス大学)

- (1) 大学とESD-大学を取り巻く持続可能性  
曾我 幸代(聖心女子大学大学院)
- (2) ESDと学力に関する教育研究  
丸山 英樹(国立教育政策研究所)
- (3) ESD推進における高等教育の役割  
小林 亮(玉川大学)
- (4) ESDによる価値観・態度・ライフスタイルの変容：カンガルー島スタディツアーを通じたフィールドスタディーズの試み  
永田 佳之(聖心女子大学)
- (5) 高等教育交流における国際理解の位置づけ：東南アジアの留学生政策から  
上別府 隆男(東京女学館大学)

##### ■ 第4分科会 T355教室

司会：山西 優二(早稲田大学)・井ノ口 貴史(京都橘大学)

- (1) 韓国教育科学技術部の多文化教育政策分析-多文化家庭子女教育支援政策を中心に-  
金 孝宣(キム・ヒョソン)・韓 王進相(ハン・ジンサン)  
<延世大学校大学院教育学科>
- (2) 多文化教育における「学び」の研究-学びの観点から-  
韓 駿相(ハン・ジュンサン)・孫 佳延(ソン・カヨン)  
<延世大学校大学院教育学科>

- (3) 豊中市国際教育推進会議の取組み：つどう・つながる・つちかう未来への行動力 豊中型国際教育の発信  
安家 紀子(豊中市教育委員会)
- (4) 地域日本語教育にみることばと問題解決の関係性-国際理解教育の視点から-  
宮野 祥子(早稲田大学大学院)
- (5) 地域日本語ボランティアの不安と気づき-養成講座の充実に向けて-  
服部 圭子(近畿大学)

##### ■ 第5分科会 T356教室

司会：今田 晃一(文教大学)・石森 広美(宮城県仙台東高等学校)

- (1) アジア・北欧7カ国の高校生による「持続可能な社会への提案」-アジア・北欧7カ国高校生国際会議から-  
伊井 直比呂(大阪教育大学附属高等学校池田校舎)・  
大島 弘和(大阪府立北淀高等学校)・  
米田 謙三(羽衣学園高等学校)
- (2) 持続可能な英語力の育成-高校生国際会議の実践を通して  
南 美佐江(奈良女子大学附属中等教育学校・立教大学大学院)
- (3) 学習内容としてのWHE(世界遺産教育)の可能性II-世界遺産教育を通じた生徒の変化  
祐岡 武志(奈良県立法隆寺国際高等学校)
- (4) 世界遺産教育における教育委員会の役割-奈良市教育委員会の現状-  
中澤 静男(奈良市教育委員会)
- (5) インドネシアの民族と文化の多様性をテーマにした多文化共生教育  
孫 美幸(立命館大学大学院)

##### ■ 第6分科会 T357教室

司会：吉村 雅仁(奈良教育大学)・栗山丈弘(文化女子大学)

- (1) 多文化共生と複言語主義についての一考察  
石川 祥一
- (2) 地球市民の資質に関する認識調査-短大英語学習者の視点から  
笠井 正隆(関西外国語短期大学)
- (3) 変則的言説としての国際理解-リオターナルへのローティの応答にもとづいて-  
佃 繁(プール学院大学)
- (4) 現代の日本人の若者の対人距離についての一考察-近接学の立場から-  
廣内 裕子(園田学園大学)
- (5) 国際理解教育における起業家教育の活用に関する研究  
吉成 佑美(上越教育大学大学院)

##### ■ 第7分科会 T358教室

司会：渡部 淳(日本大学)・磯田 三津子(京都橘大学)

- (1) 国際理解教育におけるICTの活用-デジタル紙芝居の作成と日韓交流  
木村 慶太(立命館守山中・高等学校)・韓 敬九(ソウル大学)・  
今田 晃一(文教大学)
- (2) 持続発展教育(ESD)と日韓相互理解のための教育  
釜田 聡(上越教育大学)  
許 信恵(韓国・漢南大学)
- (3) 判決書を活用した人権教育としての市民育成教育に関する日韓の授業研究(1)電子掲示板における名誉毀損事件  
梅野 正信・釜田 聡(上越教育大学)  
(泉 豊・鈴木 克典・二谷 貞夫・金 恩淑・李 惠瑛・朴 柄我・  
宮園 衛)
- (4) The Research for Korea-Japan Mutual Understanding - focused on the result of questionnaire about the image of Korea-Japan relations(日

**第2日 (6月14日) 第8分科会～第15分科会**

**■ 第8分科会 T351 教室**

司会：森田 真樹 (立命館大学)・小関 一也 (常磐大学)

- (1) 中国の多元文化教育に見る「多様性と統一」-北京市における民族団結教育の理論及び実践から-  
鶴見 陽子 (中央大学大学院)
- (2) 中学校におけるシティズンシップ教育-日本とスウェーデンの国際比較-  
武 寛子 (神戸大学大学院)
- (3) 多元的シティズンシップを育成するカリキュラム構成原理-ヨーロッパ評議会の Living in Democracy を手がかりに-  
橋崎 頼子 (神戸大学大学院)
- (4) シティズンシップ教育における多様性とナショナル・アイデンティティ-スコットランドとイングランドの比較から-  
北山 夕華 (名古屋大学留学生センター)
- (5) グローバルシティズン再考-高校での実践から  
石森 広美 (宮城県仙台東高等学校)

**■ 第9分科会 T353 教室**

司会：高橋 順一 (桜美林大学)・伊井 直比呂 (大阪教育大学附属高等学校池田校舎)

- (1) ラオス・タイのスタディツアーから生まれたESD教材-正の循環・負の連鎖から「つながり」を考える-  
水野 涼子 (聖心女子大学大学院)
- (2) 高校生のためのアフリカ開発経済学テキストを作成して-WHE授業実践の中で-  
辻 良隆 (大阪市立南高等学校)
- (3) 高校世界史におけるアフリカ史のカリキュラム開発-同時代史的視点にたった教材開発を志向して-  
井ノ口 貴史 (京都橘大学)
- (4) ウガンダと日本を結ぶ「希望」と「平和」の授業-「対話的学びのネットワーク」の考察  
風巻 浩 (神奈川県立麻生高等学校)
- (5) オーストラリア観光産業におけるアボリジニ文化の表象-アボリジニ文化の理解にむけて-  
青山 晴美 (愛知学泉短期大学)

**■ 第10分科会 T354 教室**

司会：上別 府隆男 (東京女学館大学)・服部 圭子 (近畿大学)

- (1) 授業実践と演習を通じた学びの獲得：ある韓国人留学生の場合  
齋藤 眞宏 (旭川大学)
- (2) 公立学校 (小中高) における外国籍教員の現状と課題-多様性を認めよう国際性豊かな学校をめざして-  
方 政雄 (兵庫県立淡川高等学校)
- (3) 「異文化理解教育」への提言-「国際派保育士」による実践報告「個性」の必要性-  
金 悦子 (Angel world 主宰)
- (4) 雑種 (ハイブリッド) 音楽の創造過程にみる多文化共生-京都市九条マダンの演目「和太鼓&サルムノリ」の教材化にむけて-  
磯田 三津子 (京都橘大学)
- (5) A Cultural Review on the Multiculturalism Discourse of North Korean Refugees-From and Eruditional Viewpoint (北朝鮮難民の多文化主義言説に関する文化的考察)  
Ha Jiyoung・Baek Hye Jin<Dept of Lifelong Education, Yonsei University

**■ 第11分科会 T355 教室**

司会：田尻 信壹 (富山大学)・中澤 静男 (奈良市教育委員会)

- (1) 質的分析用 PC ソフトを活用した国際理解教育の授業の分析の試み  
田島 弘司 (上越教育大学)
- (2) 博物館における歴史教育-展示と過去の再構築-  
柴田 政子 (筑波大学)
- (3) インターネットを用いた博物館事前・事後研修の在り方-国立民族学博物館の web ページ情報を活用した教員研修計画-  
今田 晃一 (文教大学)・  
天野 加奈子・長田 朋之・野呂田 純一
- (4) 博物館アウトリーチ教材の開発と実践-マレーシアにおける評価を中心として-  
山田 幸生・中島 大輔 (香芝市立鎌田小学校)

**■ 第12分科会 T356 教室**

司会：永田 佳之 (聖心女子大学)・山田 千明 (山梨県立大学)

- (1) 国際理解教育の新しい学びを創る-国民国家の揺らぎと教育現場  
小嶋 祐司郎 (奈良教育大学附属中学校)
- (2) 他者理解と自己理解を深める国際理解教育の単元開発

浅野 博子 (鳥取市立面影小学校)

- (3) 対立解決教育 (Conflict Resolution Education) の可能性-「他者理解」の観点から-  
吉田 直子 (青山学院大学大学院)
- (4) 新しい「相互依存」教材の開発に向けて  
栗山 文弘 (文化女子大学)
- (5) 発展的な文化交流をめざした授業の研究  
植木 節子 (千葉大学)・高橋 博代 (千葉大学附属中学校)

**■ 第13分科会 T357 教室**

司会：田淵 五十生 (奈良教育大学)・木村 慶太 (立命館守山中・高等学校)

- (1) ロールモデルと協働-ニューカマーの生徒への教育支援  
森川 与志夫・ロサ オチャンテ 村井 (奈良県立法隆寺国際高等学校)
- (2) ペアレントクラシーへの転換がもたらすもの-外国人児童・生徒の現状を手掛かりとして  
福山 文子 (海外日系人協会)
- (3) Bilingual/Multilingual Education towards Children within Korean Multi-cultural Family (韓国多文化家庭の子どもに対する多言語教育)  
Suh Chongnam (Deputy Director, Center for Kyonggi Multi-cultural Education) (欠席)
- (4) 持続発展教育のための代案的構造  
方 載琳 (バン・ジェイム)・申 凡哲 (シン・ボムチョル)・  
黄 泰洪 (ファン・テホン) <延世大学大学院教育学科>

**■ 第14分科会 T358 教室**

司会：中山 京子 (京都ノートルダム女子大学)・山中 信幸 (柳学園中・高等学校)

- (1) 国際理解教育の視点を生かした中学校音楽科カリキュラム試案  
居城 勝彦 (東京学芸大学附属竹早中学校)
- (2) 国際理解教育における国際問題学習の課題-高等学校国際関係学科設置校における「北方領土教育」の実践例を通して-  
松原 久 (京都府立園部高等学校)
- (3) 紛争後における民族共生構築に向けた教育の段階的アプローチ  
小松 太郎 (九州大学)
- (4) ユーゴ内戦の教材開発-人道的介入を中心に  
西尾 理 (兵庫教育大学連合大学院)
- (5) 日米教員の協同による高等学校公民科の授業開発と実践報告-単元「かつての敵との和解は可能か？」の場合-  
松井 克行 (大阪府立三島高等学校)

**■ 第15分科会 T352 教室**

司会：大津 和子 (北海道教育大学)・南 美佐江 (奈良女子大学附属中等教育学校・立教大学大学院)

- (1) 帰国生の特性を活かした世界史教育-海外ワークショップの成果を取り入れた授業実践を通して-  
山本 勝治 (東京学芸大学附属国際中等教育学校)
- (2) 多様化する帰国生への支援のあり方-お茶の水女子大学附属中学校の取り組み  
木村 真冬 (お茶の水女子大学附属中学校)
- (3) 国際理解教育における方法論の再検討- JICA 国際協力出前講座に注目して-  
中和 悠 (広島大学大学院)
- (4) 国際理解教育における効果的な出前授業の在り方に関する研究-ユネスコ活動のスタディツアーに着目して-  
小林 和平 (上越教育大学大学院)
- (5) 「協働・創造」を取り入れた異文化間交流の試み-小学生と留学生を対象としたワークショップの実践より-  
今井 寿枝・野畑 理佳 (国際交流基金関西国際センター)・  
品川 直美 (国際交流基金日本語試験センター)



分科会での熱気溢れる発表と議論

## 初めての試み「ワークショップ・オン・ワークショップ」

同志社女子大学 藤原 孝章 / 拓殖大学 石川 一喜

第19回大会第1日目の午後、「国際理解教育と『習得・活用・参画』」に結びつくワークショップや社会参加学習がめざすもの」というテーマのもとに公開シンポジウムが開かれた。

今回は、学会としては挑戦的な試みをしてきた。従来、学会のシンポジウムといえば、趣旨説明をする司会者、共通の課題について提案する登壇者、コメンテーターがいて、それぞれの役割を果たしつつ、課題について報告し、参加者からの質問も交えながら、議論するものだった。共通課題について視点やとらえ方を明確にしつつ、熱心な議論の空間が生まれることを期待するものである。しかしながら、本来そうであるべきシンポジウムが、往々にしてシンポジストたちの一方的な提案、報告に終わってしまい、参加者の立場からすれば何か物足りなさが残ってしまうのも事実であった。

そこで、今回のシンポジウムでは、開発教育などで試みられてきたワークショップによる参加型学習を取り入れ、しかも体験のみで終わってしまいがちな参加型学習をシンポジウムにおいて検証するという、まさに「ワークショップ・オン・ワークショップ」というべきアプローチを採用した。大会の参加者も実際にワークショップを体験し、学びの空間を共有することで、シンポジウムのテーマに自ら関わってもらおうと考えたのである。

本学会では、今まで「総合的な学習の時間」と関連して、国際理解教育で身につく力とは何か、確かな学力とは何かを議論してきた(学会紀要 12号)。新学習指導要領(2008年告示)では、基盤となる知識の習得や活用、探究、そして社会参画に向かう力の育成をめざしている。シンポジウムでは、学会での研究を踏まえて、国際理解教育におけるワークショップや参加型学習が知識の習得・活用・探究、参画とどのように結びつくのか、結びつけようとするならばそこにどんな課題があるのかを、参加者自身の体験的な学びを前提に、議論しようとしたのである。

### 3つのワークショップを同時開催

通常のシンポジウムでは考えられない分科会形式をとり、参加者は、①「フードマイレージ買物ゲームで何が学べるか?」(松井克行・大阪府立三島高等学校、林美帆・あおぞら財団)、②「ひとかけらのチョコレートから」(織田雪江・同志社中学校)、③「スタディツアーが生徒に与える影響—気づきと変化(行動)」(山田正人・大阪府立松原高等学校、卒業生)の3つのワークショップ分科会を選び、体験する。体験者の数には限りがあるので、残りの参加者はその様子を観察する。コメンテーター(大津和子・北海道教育大学、中山京子・京都ノートルダム女子大学、石川一喜・拓殖大学)もそれぞれが、メタ認知的な視点をもって分科会に参加する。こうして、ファシリテーター、体験者、観察者、コメンテーター(メタ的観察者)という多層的な学びが構成される。そして全体的な場で、それぞれが学びの「習得、活用、探究、参画」の視点からふりかえり(リフレクション)をしようというのがシンポジウムのねらいであった。

研究大会のプログラムには、すすめ方の概要として、はじめ

全体会場で、登壇者紹介と趣旨説明をおこない(10分ほど)、その後、3つの分科会にわかれてワークショップの体験、交流を行ない(80分ほど)、また全体会場に戻って、当日の体験者の学びを「習得、活用、探究、参画」の観点から、ふりかえりと討論をするということを知らせていたが、やはりこの学びの構造、順次性をうまく伝えることは困難だったようで、シンポジウムの全体会(講演)と分科会(ワークショップ)を別個のものとする参加者が多く、受付で用意した体験参加者カードの申込は少なかった。しかしながらこの参加型学習のワークショップは、会員のみならず非会員の関心もよんだようで、分科会での体験者は当初の数を満たすことができた。

今回のシンポジウムの試みの困難さは、参加者が分科会のすべてを同時に体験し、観察することが出来ないことであり、したがって、全体会での議論もクロスすることが果たして可能かということであった。

### 充実した「ふりかえり」と「討論」

そこで、全体会でのふりかえりと討論では、まずコメンテーターの中山京子氏から、ワークショップの学びの構造についての簡単な説明と枠組みの紹介があり、それに基づいて、ファシリテーターの3人に、今回のシンポジウムの課題にどれだけ追われたかを述べてもらい、参加者からは体験者として、また観察者としての意見をえることができた。指定討論者には、それに基づいてコメントをもらった。

#### ◇ワークショップ①「フードマイレージ買物ゲームで何が学べるか?」(中山)

「鯨肉」のカードをめぐる世代差、文化差が表れ、参加者の話はずむ場面があったが、「探究」萌芽の瞬間であったと捉えられる。ただ、時間の関係もあり、ファシリテーターが「学んでほしいこと」として結論づけてしまい、悩みや葛藤などの自分を見つめる時間がもう少し必要であった。

#### ◇ワークショップ②「ひとかけらのチョコレートから」(石川)

プログラム全体が「フェアトレード=善」を前提に組み立てられている感があった。たとえ最終的に参加者の多くがそういう気づきに至るとしても、それを疑ってみる仕掛けを設けるべきではなかったか。批判的思考を通してこそ、学びは本質に迫ることができる。

#### ◇ワークショップ③「スタディツアーが生徒に与える影響—気づきと変化(行動)」(大津)

アクティビティを通じての気づきにはいくつかのタイプがある。「知らなかったことに新たに気づく」と「自分の思い込みに気づく」ことのいずれかをねらいとしてファシリテートするのかがファシリテーターは意識しておく必要がある。

最後に、各分科会でのワークショップの様子は、懇親会にてビデオクリップで報告されたことを記しておく。

## 「ことばと国際理解教育」をテーマに実施

早稲田大学 山西 優二



課題研究を発表するパネリスト（右端は山西氏）

### 課題研究の趣旨

この研究プロジェクトを立ち上げた背景には、小学校に英語活動がその目的や方法に関して十分な議論のないまま導入されつつあること、また地域では多言語・多文化化が進展する中で、外国につながる人たちにとっての生活言語としての日本語と母語への対応のあり方が問われていること、さらには世界ではグローバル化などの影響のもと少数言語が急激にその数を減らしつつあることなど、ことばを取り巻く現場の問題状況に対して、学会もしくは研究会として何らかの視点や方策を示すことが必要であるとの思いがあった。

そのような思いを背景に、課題研究「ことばと国際理解教育」では、多言語が交錯し合う今日的状況の中で、従来の言語観・ことば観を捉えなおし、ことばに内在する身体性や音の力、ことばにみる文化性などにも注視し、改めて「ことばと国際理解教育」の関連の多様性や多様な実践の可能性を明らかにすることを基本的なねらいとした

### 研究大会報告の概要

4月のオープンフォーラムでは、「ことばの豊饒性に触れるー音・身体・学びー」をテーマに、内田樹氏（神戸女学院大学）を講師に、言語そのものを問い直す視点について考えたが、研究大会では、簡単なワークショップを取り入れつつ、これまでの研究プロジェクトでの「言語観」「ことばの役割」「ことばと国際理解教育の関連」などに関する研究内容を次のように報告した。

#### ◇ことばにみる多様な役割

司会者(山西)は国際理解教育の学習目標という視点からみたことばのもつ多様な役割として、「文化的アイデンティティの形成」「社会参加の促進」「コミュニケーション能力の形成」「社会事情・社会問題の理解」「ことばに内在する文化の理解」「感性・想像力の育成」という6点をあげ、これまでの「コミュニケーション

の道具としての役割」に偏重した捉え方を指摘した。

#### ◇身体感覚に根ざしたことばの学びの可能性

横田和子会員（聖心女子大学）は、「ことばの正しさやうつくしさ」「役に立つことば」という言語観ではなく、「身体感覚に根ざす快楽や欲望という人間の原初的な衝動をもたらすことば」という言語観から、ことばの学びを捉えていく可能性について指摘した。

#### ◇ユネスコと諸外国の言語教育政策の動向

丸山英樹会員（国立教育政策研究所）は、ユネスコの政策にみる「言語の権利」「文化の多様性」に関する動向、欧州各国の言語教育政策にみる「学力と言語の関係」「多言語・複言語政策」「少数言語・文化保護」の動向について報告した。

#### ◇英語活動・複言語活動と言語意識

吉村雅仁会員（奈良教育大学）は、小学校での英語活動の前段階としての「複言語活動」の重要性を国際理解教育の立場から指摘し、また「小学校における言語意識教育のための教材研究と開発」などの具体的な試みについて紹介した。

#### ◇地域日本語活動の動向と言語学習観

服部圭子会員（近畿大学）は、地域の多文化・多言語化に伴う地域日本語活動の現状を踏まえつつ、そこに見る学習言語観の多様性・柔軟性、そして生活課題に即した地域日本語活動の国際理解教育的発展の可能性を指摘した。

### 今後の研究課題

課題研究を進めていく中で、国際理解教育の視点から見た「ことばとコミュニケーションの関係」「ことばと文化の関係」「ことばの役割の構造化」「ことばを題材とした多様な実践の方策」など、研究課題は次々と炙り出されてきている。今後研究プロジェクトでは、10月以降年内に、「言語意識・英語活動と国際理解教育」「地域日本語活動と国際理解教育」（仮題）というテーマでの2回の公開研究会を企画中である。多くの会員にご参加いただき、さらに研究を深め、「ことばと国際理解教育」の枠がさらに大きく広がっていくことを期待したい。



熱心にメモをとるフロアーの参加者

## 第19回研究大会参加記

### ワークショップで出会った もう一つの学び

大阪教育大学附属高等学校池田校舎 伊井 直比呂



ワークショップでの充実した語り

最初に、ワークショップをご提示いただいた4人の先生方、そしてこれまでにない公開シンポジウムの展開を企画して下さった学会の先生方に改めてお礼を述べさせていただきますと思います。私は、松原高校の山田先生の「スタディーツアー」のワークショップ（「スタディーツアーが生徒に与える影響—気づきと変化（行動）」）に参加させていただきました。ワークショップの冒頭、タイを訪問した同校の卒業生が、ツアーでの「学び」を熱く語ってくれました。その姿には本物の学びを経験した自信と感謝に溢れ、言葉には成長への誇りを感じるものがありました。さて、この企画の意図を離れるかもしれませんが、私がこの部屋で考えたことを記させていただこうと思います。

松原高校の卒業生の言葉の最後は、「このような学びをさせていただいた先生に感謝しています」で終わっていました。卒業生のみなさんは、在学時に山田先生がツアーを成功させるために必要だと考えられる全ての問題解決と手続き、そして準備に奔走する姿を見てツアーに臨んだのでしょう。それ故に、一瞬たりとも無駄にできない想いでツアーに臨んだのではないのでしょうか。ここに、先生の心を通してツアーで学ぶレディネスが完成していたのだとも感じました。

同様に、ワークショップは本当に多くの準備段階を経て行われます。ご提示いただいた4人の先生方が実践されているそれぞれの参加型学習も、生徒たちは先生の工夫と努力をよく見て、「先生ありがとう！あとは任しといて、しっかり学ぶから！」という関係が築かれているのではないかと察しました。生徒は、教師の想いとかかわりを通して学びの意味をとらえ、異なる価値を受容し、自らの知や経験を止揚して自身の生き方に活用していることでしょう。だからこそ教師が予想しなかった学びが生まれ、そこから教師自身も学ぶのが参加型学習の一つの特徴なのだと思います。きっと、隠れた習得—活用—参画が身につけているかもしれません。ありがとうございました。

### 充実した二日間に感激

目白大学 若井 知草

大会前夜、近鉄新田辺駅からタクシーで宿泊先のウェルサンピアホテルに向かった。その道中のあまりの暗さと、親しげに語りかけてくれる運転手さんの方言に新鮮なよろこびと安らぎを感じた。私にとって出張先での楽しみの一つは、その土地の人々が話すことばを耳にすることである。今大会の会場は京田辺市の同志社女子大学で、多数の学生さんたちが大会をサポートしてくださったが、彼女達が受付で対応するのを聞いているだけでたまらなくわくわくした。「先生」と呼びかけることば一つをとっても、なんとも言えずやわらかく心地よかった。

さて、大会一日目。自由研究発表は、第1分科会から第7分科会まで行われた。どの分科会も興味深いテーマの発表が盛りだくさんで、すべての会場のすべての発表をお聞きしたいと願うところであったが、第2分科会と第4分科会に参加することにした。まず、第2分科会の「クジラを通して世界を見つめた総合的な学習の時間の実践」は、志村小学校での公開授業を実際に見学させていただいたこともあり、そのときの子どもたちの生き生きとした様子がありありと思い起こされた。第4分科会では地域の日本語教育に関する発表が続き、多様化する日本における日本語教育の現状や重要性を再認識した。

大会二日目、午前の自由研究発表は、第8分科会から第15午後の特設課題研究「ことばと国際理解教育」は、4月のオープンフォーラム「ことばの豊饒性に触れる—音・身体・学び—」の余韻も残しつつ、さらに様々な立場からことばをめぐる議論が展開され、ことばやそれを学ぶことの本質的なおもしろさについて考えさせられた。

大会が終了して外に出ると、同志社女子大学の学生さんたちが最後まで我々を見送るために各々の持ち場に待機していることに感激し、後ろ髪を引かれる思いで会場を後にした。



言葉のイメージをフロアーに尋ねるパネリスト（編集提供）

## 記憶に刻まれた シンポジウムでの活動

聖トマス大学 本多 千明

何よりも、国際性豊かな大会であった。中国や韓国からも多数の研究者が参加し、会期を通して各国研究者が活発な学術的かつ人的交流を繰り返した。これも、ひとえに今回の研究大会実行委員長の藤原孝章先生をはじめ、多くの関係各位が学会の成功を目指して日に夜を継いで準備に邁進された賜にほかならない。僭越ながら、その熱意と努力に心より拍手を送りたい。また、この大会は、私が青春を謳歌したキャンパスで開催されたことに加え、斬新なワークショップ・オン・ワークショップ形式のシンポジウムもあり、深く永く私の記憶に刻まれるにちがいない。

そのシンポジウムは、提案者が3つの会場に分かれてワークショップ形式で提案を行い、最後に全体会で総括的検討を行うという、それぞれのテーマを分散したまま放置せず、参加者がみなでシンセサイズして共有するという独特かつ新鮮な方式で展開されたものであった。このシンポジウムは、知の能動的総合化という新たな教育アプローチを視野に入れた、学会の果敢な企図として、初学者の私の心を躍らせた。

私自身は、同志社中学校の織田雪江教諭が提案される「ひとかけらのチョコレートから」ワークショップ形式の分科会に参加した。ここでは、チョコレートという身近なお菓子を教材として生産・流通・販売過程を学び、世界の白地図を色分けして原産国と消費国における南北問題の分布を読み取り、社会的不正を学ぶ者の立場で考え、最後には、市販とフェアトレードの各々のチョコレートを皆で食べ比べた。これほど「甘くて苦い」ワークショップを私は寡聞にして知らない。

「フェア」という価値の意義をどのような教育実践を通じて子ども達に伝えていけばいいのか？その重い課題に、学会という「知の坩堝」は確かな手がかりを与えてくれた。「何はさておいても、学会には出よう。」改めて誓った一日だった。



ワークショップ型シンポジウムから多くのことを学ぶ (編集提供)

## 大会 2 日目第 8 分科会に参加して

中央大学 (院生) 津山 直樹



「省察」と「現在」を意識させてくれた分科会  
(編集提供: 写真は第 8 分科会とは関係ありません)

会員になって初めて研究大会に参加した。この分科会は「シティズン・シップ」がテーマであった。発表内容はアジア・ヨーロッパと地域もさまざまであり、理論と実践の両方があり、広がりがある分科会であった。各発表に共通する概念が「その国の国民としてのアイデンティティ」と「グローバルリズムの中のシティズン・シップ (市民性)」のバランスの取り方であったように思われる。

地球規模の課題を解決すべく登場してきた OECD の提唱するキー・コンピテンシーやユネスコの提唱する ESD などの教育理論はこの分科会でのテーマとなっている「シティズン・シップ」がその根本にあり、その在り方を模索する必要性を再認識させられた。また、自己のアイデンティティを保持しながら他者を寛容することの難しさを痛感しつつも、この課題に挑戦する意義を感じることができ、私自身も積極的に挑戦しようと思わせてもらった。

各発表から考えさせられたことは、「省察」と「現在」ということである。前者については常に自己を相対化していくことと捉えられるが、「自己」を認識するために「他者」に気づき、「他者」を受容し、「他者」とつながることが重要であり、それを前提にグローバルリズムの中での「自己」の立ち位置を認識していかなければならず、常に変化する世界の中ではこの「省察」を意識しておくことが不可欠であると考えられる。後者については「省察」を意識するためには「現在」という時間概念を捉えておくことが必要であると考えられる。アウグスティヌスは時間概念を「過去とは現在の記憶であり、未来とは現在の期待である」と定義している。この「現在」の捉え方こそがグローバルな市民とローカルな国民をつなぐ「グローカリズム」の根本で、地球市民としての「シティズン・シップ」の基になる考え方になる可能性を感じさせてくれた第 8 分科会であった。



## 小特集「新学習指導要領と国際理解教育」

### 「知識基盤社会」の到来と 作業的・体験的な学習

富山大学 田尻 信壹

昨（2008）年3月に小学校・中学校の、また今（2009）年3月に高校・特別支援学校の学習指導要領が告示された。新学習指導要領を国際理解教育の視点から見た場合、どのような点に注目できるだろうか。今回は、「小・中学校社会科での作業的・体験的な学習」と「小学校外国語（英語）」に焦点をあて、取り上げてみよう。



今回の改訂では、今日の「知識基盤社会」の到来の中で「生きる力」を育むという理念が強調され、知識・技能の習得と思考力・判断力等の育成のバランスが重視されることになった。「知識基盤社会」とは、聞き慣れない言葉である。現代社会の特徴としての、「知識基盤社会」とはどのような社会を言うのだろうか。2008年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」によれば、その特質として「①知識には国境がなく、グローバル化が一層進む、②知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間無く生まれる、③知識の進展は旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要となる、④性別や年齢を問わず参画することが促進される」の4点をあげている。グローバル化の加速化に伴い、知識・技能の習得、思考力・判断力等の育成と社会への参画が求められることになり、作業的・体験的な学習の充実がはかられることになった。

では、新学習指導要領の社会科では、作業的・体験的な学習としてどのような学習があげられているのか。指導計画の作成に当たっての配慮事項として、小・中学校とも共通に、観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動の一層の充実を図ることや、博物館や郷土資料館等の施設の活用を図る等をあげており、知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等のバランスを重視することになった。そのためには、社会科では、多様な資料の活用が不可欠であり、博物館や資料館の調査・見学を取り入れるなどの工夫が期待されている。



博物館を活用した中学校社会科の調べ学習

### 小学校における「外国語活動」と 国際理解教育

目白大学 中山 博夫



外人講師と協力しての小学校外国語の授業

今年度、東京都江戸川区の数校の小学校で「外国語活動」の授業研究に関わっている。平成23年度の「外国語活動」の完全実施に向けて、どの学校でも担任だけで行う授業の在り方を、手探りで必死に模索しているように感じる。先生方の話では、それまでの小学校英語活動の授業は、授業の実施回数もそれほど多くなく、ALTに頼って実施されることが多かったようだ。だが、週1回の授業となると、ALT抜きで、担任だけで授業を進めなければならない場合が急増するのである。「外国語活動」の授業研究は必要に迫られているのである。

これまで、いくつもの「外国語活動」の授業を参観してきた。外国語のスキルに重きを置いた授業であることも多々あった。だが、小学校の「外国語活動」の目標は、外国語のスキルを定着させることではなく、以下のようなものである。

- ①外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深める。
- ②外国語を通じて、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図る。
- ③外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる。

つまり、「外国語活動」の授業とは、「言語や文化」の体験が大切なのであり、「コミュニケーションを図ろうとする態度」を育成することが重要なのであり、「外国語の音声や基本的な表現」に慣れ親しませようとするをねらいとした活動なのである。

筆者は、小学校の先生方と共に、次のような「外国語活動」を育てていきたいと考えている。それは、外国語を使った体験的なコミュニケーション活動を促進し、日本と外国との言語、生活、習慣等についての体験的な理解を促し、様々な言語の存在を体験的に気付かせる、国際理解教育としての「外国語活動」なのである。

## 国立民族学博物館を活用した国際理解教育

茨本市立葦原小学校 八代 健志



佐々木利和氏による新みんなく「アイヌ文化にであう」の紹介風景

第5回博学連携ワークショップが、8月4日、大阪府吹田市の万博記念公園の国立民族学博物館にて開催された。

日本国際理解教育学会と国立民族学博物館の協働ももう5年めである。この催しは、博物館の持つモノと学会の持つ教育経験の積み重ねを合わせ「足し算」でなく「掛け算」になるような成果を求め継続されてきた。今年8月にはその一つの「結実」として明石書店から民博側中牧氏と学会側森茂・多田両氏の編著による『学校と博物館でつくる国際理解教育―新しい学びをデザインする』を出版したばかりである。

### 第一部は、講演会とミュージアムツアー

第一部の開会から熱気にあふれていた。諸挨拶の後、藤原孝章氏（同志社女子大）の「素材から教材へ」、民博の佐々木利和氏のみんなく「アイヌ文化にであう」の紹介、民博ミュージアムパートナーズ（MMP）による「博学連携の取り組みに関する報告」の三講演があり、その後、参加者の多くが楽しみにしていた「民博の教員によるミュージアムツアー」に出発した。

今回のミュージアムツアーは、主にリニューアルされたアフリカ展示、西アジア展示を竹沢尚一郎・川口幸也・上羽陽子の三氏の案内でまわった。

当日実施したアンケートから、参加者の声を拾ってみた。

- ・アフリカにしぼってミュージアムツアーをしたことはとても良かった。全部回るのは大変です。
- ・モノばかりでなく現地の“人”を紹介している展示は、イメージしやすく、また同じ人間としての環境や生き方の違いを考えさせるので良かった。
- ・アフリカと西アジアの展示は旧展示に比べてぐっと自分の「手」に近いという印象を受けました。広いスペースにぎっしりと詰め込まれたモノを遠くから何となく眺めるのではなく、一つ一つ手に取ったり、しげしげとのぞき込める近さで、しかもマルチメディアを使用した説明は分かりやすかったです。

### 第二部は、5つのワークショップから構成

さて、昼食をはさみ、ワークショップの開催である。前4回の経緯をふまえ、5つのワークショップが実施された。充

実してきたプログラムの概要を紹介すると、以下のようになる。

#### ①北西海岸先住民の木箱づくり

（担当：木村 慶太、山田 幸生、岸上 伸啓、宇治谷 恵氏）  
先住民の意匠を、彼らの生き方にも思いをはせながら体験的に描いていく。

#### ②仮面をつくって語って異文化理解

（担当：秋山 明之、笹原 亮二、早乙女 賢司氏）  
仮面の実物に触れながら体験的に作られた意味を知って身近に感じながら自分の仮面を作り、語る。

#### ③モノからひらめくモノコード

（担当：居城 勝彦、八代 健志、寺田 吉孝氏）  
竹を共鳴体を使う一弦の楽器を、展示場の諸民族の楽器を参考に、世界に一つの楽器としてつくり上げる。

#### ④ひとかけらのチョコレートから

（担当：織田 雪江、八杉 佳穂、鈴木 紀氏）  
身近なチョコレートに、多くの「ストーリー」があり、様々な立場について考えさせられるものであると知る。

#### ⑤ to 私 from 私

（担当：田尻 信壹、上羽 陽子氏）  
展示資料の収集地から自分のもとに届くことを想像しながら絵ハガキを作成し、それが現地から送られてくることを楽しみに待つ。

### 「映像で振り返る講評」に感動

いよいよプログラムの最後は、今回も「映像で振り返る講評」であった。上田信行氏（同志社女子大）の作成した「ブレイフルな学びの姿」にあふれた参加者の感動的な映像で一日のプログラムをふりかえり、大津和子氏（北海道教育大）の講評を心地よい充実感を持って聞いた。

時間的・空間的制約や安全上の配慮もあって、存分に力を発揮できなかった部分もあったが、楽しそうにエネルギーに講演を聞き、ワークショップで活動された皆さん、そしてプログラムの実施に関わったすべての会員諸氏のご努力に対して感謝する。日本国際理解教育学会と国立民族学博物館という二つの組織を見事に連携させた森茂岳雄氏（中央大）と中牧弘允氏（民博）にも心から敬意を表したい。



「to 私 from 私」での絵ハガキ作りに参加された皆さん

## 『学校と博物館でつくる国際理解教育』を刊行

ノートルダム女子大学 中山 京子

### 博学連携でつくる国際理解教育

博物館と学校と学会、この3つが出会ってコラボレーションの未来が生まれ、『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする—』（中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編、明石書店、2009）が刊行された。

本書では、国際理解教育の実践にむけて学校と博物館はどのように連携できるのかを追究している。本学会の森茂岳雄会員と国立民族学博物館の中牧弘允氏の導きによって展開された7年間にわたる活動の集大成といえるだろう。国際理解教育をめざした博学連携のあり方をめぐる議論を理論化するとともに、アウトリーチ教材や展示をもとにした授業づくり、研究者や学会の連携による教員研修ワークショップなど、豊富な実践報告を通してその可能性を提示している。共同研究に関わり、実践や教員研修ワークショップを展開してきた本学会会員も多く執筆に参加し、国際理解教育実践を豊かに語る一冊である。ご一読いただき、来年の夏に国立民族学博物館にご参加いただけたら幸いである。

### 『学校と博物館でつくる国際理解教育』の内容構成

- 序論：国際理解教育における「博物館—学校—学会」の連携  
（中牧弘允・森茂岳雄）
- 第Ⅰ部：博学連携による国際理解教育の基礎理論
- 1章 博物館からみた博学連携（中牧弘允）
  - 2章 学校からみた博学連携（森茂岳雄）
  - 3章 学会からみた博学連携（多田孝志）
- 第Ⅱ部：博学連携による国際理解教育の授業実践
- 序章 モノが育てる異文化リテラシー（高橋順一）
- 1章 アウトリーチ教材で広がる教室実践
    - 1 「みんぱく」—ツール開発とミュージアム・リテラシー（佐藤優香）
    - 2 「異文化発見キット」—利用者と支援者の対話（高橋順一）
    - 3 「ニッケイ移民トランク」—グローバル教育と多文化教育をつなぐ（森茂岳雄・中山京子）
    - 4 アウトリーチ教材を用いた博学連携実践（居城勝彦）
  - 2章 素材から出発する授業実践
    - 1 願いをこめた仮面をつくろう—鑑賞と表現の循環（佐藤優香・八代健志）
    - 2 仮面を使った教材開発—異文化共生社会に生きる（秋山明之）
    - 3 民博展示と世界史カリキュラム（田尻信壹）
    - 4 文化祭でつくるミニ博物館（木村慶太）
    - 5 民博展示とプロジェクト学習（林原慎・加藤謙一）
  - 3章 企画展を生かした授業実践
 

序 企画から活動へ（織田雪江）

    - 1 「弁当からミックスプレートへ」①—授業実践に生かす（森茂岳雄・中山京子）



「博学連携教員ワークショップ 2009in みんぱく」当日に発売

- 2 「弁当からミックスプレートへ」②—クラブ活動に生かす（織田雪江）
  - 3 民博オセアニア展示—修学旅行の事前学習に生かす（柴田元）
  - 4 「みんぱくキッズワールド」—総合的学習に生かす（古川岳志）
  - 5 「多みんぞくニホン」—社会科の授業に生かす（織田雪江）
- 第Ⅲ部：博学連携による国際理解教育の教員研修
- 序章 研究から研修へ（中山京子）
- 1章 博学連携による教材・カリキュラム開発支援
    - 1 フィールドワークを生かした教材開発（大津和子）
    - 2 開発教育（ESD）の教材開発（藤原孝章）
    - 3 カリキュラム開発支援（今田晃一）
  - 2章 民博研究者との連携による教員研修
    - 1 パンダナス物語（中山京子）
    - 2 竹から音が生まれるとき（居城勝彦・八代健志）
    - 3 ひとかけらのチョコレートから（織田雪江）
    - 4 割り箸で海図をつくろう（田尻信壹）
    - 5 楔形文字で名前を書こう（森若葉）
  - 3章 討論—教員研修ワークショップをつくる
- 第Ⅳ部：博学連携による国際理解教育の実践課題
- 1章 展示をつくる、展示をつかう—民博オセアニア展示の試み（林勲男）
  - 2章 ボランティアによる博学連携—社会連携の視点（宇治谷恵）
  - 3章 意味をつくりだす学びのデザイン（上田信行）
  - 4章 博学連携の課題—相互メリット再考（小笠原喜康）
- 資料：博学連携みんぱく教員研修ワークショップのプログラム

# 2008(平成20)年度総会報告

## 2008(平成20)年度日本国際理解教育学会の事業報告について

### 1. 第19回研究大会開催

2009年度の研究大会(実行委員長 同志社女子大学藤原孝章教授)は同志社女子大学で6月13日(土)・14日(日)の両日にわたって、279名の参加者を得て、盛会に行われた。今大会は15分科会、70の自由研究発表があり、学会研究大会始まって以来の発表件数と参加者数であった。

期間中に総会が開かれ、2008年度事業、決算報告と2009年度の事業計画、予算案が承認された。

### 2. 各委員会報告

#### 1) 研究委員会

2007～2009年度の共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、その下に三つのプロジェクトを並行して走らせ、順次年度毎に研究会やワークショップを通して広く会員に公開し、最終的に研究大会時に特定課題研究としてその成果を共有することになっている。

(1)「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」(担当理事: 田淵五十生)

(2)「ことばと国際理解教育」(担当理事: 山西優二)

(3)「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(担当理事: 嶺井明子)

2008年度は、山西理事を筆頭に、2008年秋以降、定期的に研究会を実施し、2009年4月には「ことばの豊饒性に触れる-音・身体・学び-」をテーマにオープンフォーラムが開催された。

#### 2) 紀要編集委員会

紀要『国際理解教育』15号に向けての論文募集、編集作業がおこなわれ、本研究大会での刊行にいたった。

第15号からは、学会の特定課題研究に対応した特集論文を掲載することとなり第15号では「世界遺産教育と国際理解教育」として、1つの実践論文と2つの研究論文を掲載した。

#### 3) 国際理解教育実践研修会・各プロジェクトについて

①東京研修会「鯨をテーマとした国際理解教育の実践」(高橋順一理事)

東京都板橋区立志村小学校で行われた国際理解教育実践研修会の報告。大学が学校と連携することによって信頼性の高い情報と教材資料を提供し、学校に鯨学習を実施しやすい環境(情報および教材資料)を整えることを試みた実践研修であった。学校評議員、保護者や近隣住民等、大勢の見学者があった。

②奈良研修会「博物館を活用した国際理解教育の実践」(今田見一理事)

香芝市教育委員会との連携のもと、文部科学省『国際理解教育実践事例集・中学校および高等学校編』(教育出版、2008年9月発行)事例集掲載の3つの事例報告とマレーシア工科大学のクマラグル・ラマヤ先生の多民族国家マレーシアにおける国際理解教育の現状についての講演会の2部構成で実施された。香芝市の中谷彪教育長はじめ幼稚園・小学校・中学校の先生方を中心に78名の参加があった。

#### 4) 国立民族学博物館との共同事業

年々参加者数が増え、4回目の今年は一般参加者122名、館内外のスタッフ30名、事務方5名という盛況ぶりであった。

#### 3. 韓国国際理解教育学会及びワークショップ参加(藤原孝章理事)

第9回韓国国際理解教育学会がテジョン市の忠南国立大学にて開催され(11月8～9日)、日本からは9名の会員が参加し発表を行った。シンポジウムでは寺島隆吉会員が、ワークショップでは服部圭子会員が報告した。日韓中教材開発ワークショップでは、栗山丈弘会員が「食」グループの成果を、また、森茂岳雄会員、中山京子会員、服部圭子会員が「移民」グループの成果を発表した。さらに、石川祥一会員、釜田聡会員も研究成果を発表した。

#### 4. 公文国際奨学財団夏期教員研修派遣

新潟市立白根北中学校の荒川洋子会員と宮城県仙台台東高等学校の石森広美会員を推薦、派遣した。

#### 5. 理事会開催

(理事会)平成20年6月13日 富山、平成20年1月31日 東京

(常任理事会)平成20年10月5日 東京、平成21年4月19日 東京

#### 6. 事務局報告

1) 会報発行 第33号(2008年10月)、第34号(2009年3月)

2) 後援名義

・グローバル教育コンクール2008(主催:外務省)

・平成20年度国際教育セミナー(主催:財団法人大阪府国際交流財団)

・夏期教員ワークショップ(主催:武蔵野市国際交流協会)

3) 会員数(2009年3月末)

478名(正会員397名、学生会員73名、団体会員8)

4) 会費納入状況 73%

## 2008(平成20)年度日本国際理解教育学会の収支決算

平成20年4月1日から平成21年3月31日まで

### I. 収入の部

科目	20年度決算額	21年度予算額	備考
入会金	120,000	153,000	3,000×51名
年会費	3,456,000	2,804,000	過年度分244,000/20年度分2,464,000/21年度分96,000
助成金	1,000,000	1,000,000	公文国際奨学財団より
雑収入	250,000	60,133	紀要販売等
当期収入合計(A)	4,826,000	4,017,133	
前期繰越収支差額	1,493,285	1,493,285	
収入合計(B)	6,319,285	5,510,418	

### II. 支出の部

科目	20年度決算額	21年度予算額	備考
1. 事業費	3,530,000	3,008,867	
大会運営補助費	400,000	400,000	21年度大会用
紀要委員会費	220,000	184,600	15号編集費
紀要刊行費	1,100,000	1,100,000	14号刊行費
会報刊行費	300,000	243,100	Vol. 33, 34刊行費
理事会費	520,000	412,520	
研究委員会費	600,000	500,000	
国際理解教育実践研修会費	200,000	103,567	
国立民族学博物館との共同事業	100,000	65,080	
国際交流費	60,000	0	
学会賞	30,000	0	
2. 管理費	880,000	417,642	
事務局経費	100,000	60,000	学会HPデータベース改訂費用
人件費	240,000	47,000	事務アルバイト代
通信費	270,000	155,400	郵送費
設備・備品費	10,000	0	
消耗品費	60,000	29,442	プリンタ用インク、宛名ラベル代
会議費	30,000	14,455	会場借料
旅費交通費	80,000	66,010	
印刷製本費	80,000	39,375	封筒印刷代
雑費	10,000	5,960	振込手数料
3. 予備費	100,000	0	
当期支出合計(C)	4,510,000	3,426,509	
当期支出差額(A)-(C)	316,000	590,624	
次期繰越収支差額(B)-(C)	1,809,285	2,083,909	

# 2009(平成21)年度事業計画・予算

## 2009(平成21)年度日本国際理解教育学会の事業計画について

### 1. 全体方針 (多田孝志会長)

- ① 会員に資する学会運営と学会組織の改善
- ② 21世紀の教育的課題に対応した研究・実践活動の展開
- ③ 海外の関連学会・団体、国内の関連組織との連携の発展
- ④ 学会の財政の安定化に向けて、会員の拡大と会費納入の促進
- ⑤ 会員の研究実践活動への支援及び活動機会の拡大
- ⑥ 20回記念大会に向けての企画立案

### 2. 各委員会等事業計画

#### 1) 研究委員会 (森茂岳雄理事)

2007～2009年度の共通の研究テーマ「共生社会の構築と国際理解教育」の下、現在三つのプロジェクトを並行して走らせ研究を行っている。各プロジェクトの今後の計画は次の通りである。

(1) 「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」(担当理事：田淵五十生)

2009年12月6日(日)公開研究会(於奈良市)

(2) 「ことばと国際理解教育」(担当理事：山西優二)

2010年6月『国際理解教育』Vol.16で「特集」(予定)

(3) 「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(担当理事：嶺井明子)

2009年度 オープンフォーラム等(予定)

2010年 研究大会 特定課題研究「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(予定)

2011年『国際理解教育』Vol.17で「特集」(予定)

なお、2009年度から始まる新規「特定課題研究プロジェクト」について次のような方針を決定した。

① 引き続き共通研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とする。今後テーマにある「共生社会」について、各プロジェクトチームで議論し共通認識を作っていく。そのために、プロジェクト間の連絡を密にしておく。

② 新規プロジェクトに関しては、理事をメンバーに含めるかたちで募集する。

以上の理事会決定に従い、理事に対して新規プロジェクトの募集を行ったところ、「持続可能な社会形成と教育—ESDの実践基盤に関する総合的研究—」(担当理事：永田佳之)の応募があり、検討の結果、このプロジェクトの採択を決定し、研究を進めることとなった(研究期間：2009年度～2011年度)。

#### 2) 紀要編集委員会 (高橋順一理事)

- ① 紀要『国際理解教育』VOL. 16の編集と刊行
- ② 会員からの論文投稿募集
- ③ 16号は特集(ことばと国際理解教育)を企画
- ④ 学会賞について

紀要編集に関わって学会の新しい試みとして「学会賞」を設けることが決まった。その趣旨は、国際理解教育の研究・実践の成果に対する顕彰である。当学会掲載誌査読論文を対象とするもので、3年に1回とし、若干の賞金・賞品を含めて、若干名の個人または1団体を表彰する(該当者なしの場合もある)。この3年は、紀要編集委員会の任期と対応するもので、最も早い場合で、紀要14号(2008年)、15号(2009年)、16号(2010年)の掲載論文が対象になる。なお、審査機関は紀要編集委員会である。

#### 3) 各事業

① 国立民族学博物館との共同事業 (森茂岳雄理事)

博学連携教員研修ワークショップ2009—博物館を活用した国際理解教育—会場 国立民族学博物館 8月4日(火)

② 国際理解教育実践研修

国際理解教育の実践方法(カリキュラム開発、学習方法、教材開発等)についての研修会の開催

予定 「ESD・」に関する研修 2009年秋 名古屋

「コミュニケーションと国際理解教育」2010年2月 東京

③ 日中韓相互理解のための教材開発成果発表

会場 京都 6月14日(日)

#### 4) その他

① 国立民族学博物館出版事業への協力

日本国際理解教育学会と国立民族学博物館が共催して開催してきた「博学連携教員研修ワークショップ in みんな」の5年間の研究成果を国立民族学博物館の出版助成を受けて、中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志編『学校と博物館でつくる国際理解教育-新しい学びをデザインする-』(明石書店、2009年8月出版予定)として出版することになった。

#### 3. 2010年度第20回研究大会への準備

開催日時 平成22年7月3日(土)～4日(日)

開催会場 聖心女子大学(東京)

実行委員長 永田佳之(聖心女子大学准教授)

記念大会行事 学会事務局

## 2009(平成21)年度日本国際理解教育学会の予算

平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

### I. 収入の部

科目	20年度決算額	21年度予算額	備考
入会金	153,000	240,000	3,000×80名
年会費	2,804,000	3,000,000	
助成金	1,000,000	1,000,000	公文国際奨学財団より
雑収入	60,133	50,000	紀要販売等
当期収入合計(A)	4,017,133	4,290,000	
前期繰越収支差額	1,493,285	2,083,909	
収入合計(B)	5,510,418	6,373,909	

### II. 支出の部

科目	20年度決算額	21年度予算額	備考
1. 事業費	3,008,867	3,350,000	
大会運営補助費	400,000	400,000	22年度大会用
紀要委員会費	184,600	200,000	16号編集費
紀要刊行費	1,100,000	1,100,000	15号刊行費
会報刊行費	243,100	300,000	Vol. 35, 36刊行費
理事委員会費	412,520	400,000	
研究委員会費	500,000	600,000	
国際理解教育実践研修会費	103,567	200,000	
国立民族学博物館との共同事業	65,080	90,000	
国際交流費	0	30,000	
学会賞	0	30,000	
2. 管理費	417,642	740,000	
事務局経費	60,000	60,000	学会HP更新費
人件費	47,000	100,000	事務アルバイト代
通信費	155,400	330,000	郵送費(理事選挙用含む)
設備・備品費	0	10,000	
消耗品費	29,442	40,000	プリンタ用インク、宛名ラベル代
会議費	14,455	30,000	会場借料
旅費交通費	66,010	80,000	
印刷製本費	39,375	80,000	封筒印刷代
雑費	5,960	10,000	振込手数料
3. 予備費	0	200,000	
当期支出合計(C)	3,426,509	4,290,000	
当期支出差額(A)-(C)	590,624	0	
次期繰越収支差額(B)-(C)	2,083,909	2,083,909	

# 理事会(各委員会等)報告

## 研究委員会より

中央大学 森茂 岳雄

研究委員会では、学会が行う2007～2009年度の共通の研究テーマを「共生社会の構築と国際理解教育」とし、その下に担当理事を中心に複数のプロジェクトを設置し研究を進めてきている。各プロジェクトは、順次年度毎に公開研究会やワークショップ、オープンフォーラム等を通して研究成果を積み上げ、最終的に研究大会時に特定課題研究としてその成果を公開し、それを学会紀要『国際理解教育』に特集としてまとめることになっている。各プロジェクトのテーマとこれまでの活動報告及び今後の予定は次の通りである。

1. 「ユネスコの世界遺産教育と日本の国際理解教育」(担当理事: 田淵五十生)

本プロジェクトは2008年度をもって終了し、その成果を2009年6月発行の『国際理解教育』Vol.15で「特集」としてまとめた。

2. 「ことばと国際理解教育」(担当理事: 山西優二)

2009年4月19日(日)に、オープンフォーラム「ことばと国際理解教育—ことばの文化性・身体性・音の力—」(於早稲田大学)を開催し、中間的な研究成果の共有を行ったとともに、2009年6月14日(日)の第18回研究大会(於同志社女子大学)の特定課題研究において研究成果の最終報告を行った。現在その成果をまとめて、次号の『国際理解教育』Vol.16で「特集」の予定である。

3. 「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」(担当理事: 嶺井明子)

現在、定期的に公開研究会を開催し研究を積み重ねてきている。2009年12月12日(土)には、中間報告を兼ねてオープンフォーラムの開催を予定している。このフォーラムを受けて、2010年7月開催の第19回研究大会(於聖心女子大学)以上のように、現在プロジェクト方式による3年間の研究計画が順調に進行している。(1)については、昨年度で終了になったため、2009年度から始まる新規プロジェクトについて1月31日開催の理事会で審議を踏まえ、新規プロジェクトを募集した所、下記一件の応募があり、4月19日開催の常任理事会、および6月12日開催の理事会においてにおいて新規プロジェクトとして研究を開始することが承認された。

4. 「持続可能な社会形成と教育: ESDの実践基盤に関する総合的研究」(担当理事: 永田佳之)

尚、2010年度開始の新規プロジェクトの申請希望者は、理事を通して本年12月5日までに申請して下さい。申請用紙は、学会事務局又は森茂までご請求下さい。

## 紀要編集委員会より

同志社女子大学 藤原 孝章

1. 学会紀要『国際理解教育』Vol.16の発行スケジュールが確認されました。論文応募の締め切りは7月21日で、原稿の締め切りは、2カ月後の9月24日でした。その後査読をへて、掲載論文が決

定します。最終原稿の提出期限は3月10日です。応募論文の取り扱い、前号に引き続き、研究と実践研究を同列に扱うこと、会員の投稿をすすめること、ていねいな査読をおこない、リライトの仕方などについてもアドバイスをすることなどです。15号からはじまった「特集論文」のページは「ことばと国際理解教育」です。なお、誌面として、学会が行なうプロジェクト、公文国際財団の助成による教員海外研修の報告、書評・新刊紹介などは、前号と同じです(注: 書評・新刊ともご希望の場合は編集委員会に著書を寄贈してください。委員会で判断の上、依頼させていただきます。新刊紹介については前号から執筆者による紹介としています)。

2. 「学会賞」について

すでにご案内のとおり、国際理解教育の研究・実践の成果に対する顕彰として「日本国際理解教育学会賞」を設けます。紀要14号(2008年)、15号(2009年)、16号(2010年)掲載の査読論文を対象に、若干名の個人または1団体を表彰します(該当者なしもあります)。2010年度の第20回研究大会(聖心女子大学、7月4、5日開催予定)で発表、表彰されます。

3. 新刊紹介について

最後に、紀要第15号について、英文タイトル他、誤記など校正上のミスについて何点かご指摘を受けました。当委員会としては、出版社と緊密な連絡をとっておりますが、十分な確認が出来ず、執筆者の皆様にはご迷惑をおかけ致しましたことをお詫びいたします。

## 理事会・事務局より

目白大学 中山 博夫

今年度最初の理事会が、6月12日に同志社女子大学現代社会学部で開かれ、多田孝志会長、大津和子副会長を始め12名の理事に事務局2名を含めた14名が出席した。

理事会では、研究プロジェクトに関する議論がなされた。現在、1本の研究プロジェクトが終了し、2本の研究プロジェクトが進行している。終了したプロジェクトは、田淵理事を中心とした「ユネスコの世界遺産教育と国際理解教育」である。この研究プロジェクトの内容は、本学会紀要『国際理解教育』第15号で報告されている。進行中の研究プロジェクトは、山西理事を中心とした「ことばと国際理解教育」、嶺井理事を中心とした「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」である。そして、新たに永田理事を中心とした「持続可能な社会形成と教育—ESDの実践基盤に関する総合的研究—」の研究プロジェクトがスタートすることが確認された。3本の研究プロジェクトは、共通テーマ「共生社会の構築と国際理解教育」の下で進められている。できるだけ多くの会員の参加を得て、充実した研究にする方向が求められた。各プロジェクトの詳細は学会HPに順次掲載していく予定である。

また、今田理事からは奈良県香芝市での研修会「博物館を活用した国際理解教育の実践」についての報告があった。森茂理事からは、国立民族学博物館との共同事業についての報告があった。

そして、来年の第20回研究大会についても話し合われた。第20回大会では、記念事業を行うことになり、記念講演は、東京大学大学院教授の佐藤学先生に引き受けていただけることになった。

## 会員だより

### アジア版エラスムス計画の可能性に関する調査研究の紹介

東京女学館大学 上別府 隆男

平成 20 年度文部科学省先導的・大学改革推進委託事業（調査研究テーマ：アジア・太平洋地域における大学間交流等の拡大）を受託し、昨年 10 月から本年 3 月までアジア・欧州各国で調査を行い、文部科学省に報告書を提出しました。報告書は [www.tjk.ac.jp](http://www.tjk.ac.jp) でダウンロードできます。

調査のそもそもの発端は、昨年 5 月福田元首相が行ったスピーチで、アジア版エラスムス計画構想を打ち上げたことです。エラスムス計画とは、1987 年欧州連合（EU）が始めた大学間の短期交流促進のための計画であり、ヨーロッパ各国で勉学を修めた大学者エラスムスにちなむ名前です。現在は、欧州高等教育圏の確立を目指すボローニャ・プロセスの一環と位置付けられています。アジア版エラスムス計画は、今後アジア地域で学生移動が飛躍的に拡大するという予想に対応するものです。本調査では、対象国を ASEAN + 3（日中韓）の 13 カ国としました。

現地調査では、各国における学生交流の現状と今後の展開について、政府機関や大学を対象にインタビューや文献収集を行い、学生交流促進のための方策と課題を明らかにすることを目的としました。調査から見えてきたことは、各国の制度の多様さが、学生の国から国への移動を難しくしているかということです。各国はそれぞれ独自の理由で教育制度を発展させてきたのですが、グローバル化が急速に進む中、人の国際的移動は拡大の一途を辿っています。高等教育レベルでグローバルな人材を育てようという考えで、各国とも留学生の受け入れ、送り出しを推進しているのですが、留学生が学びやすくなるよう環境を整備することが必要です。この動きを「高等教育の調和化」と呼んでいます。調和化とは、標準化ではなく、各国の独自性を尊重しつつ、例えば、学位、単位、学習期間などの互換性を高めることです。EU のように統合の求心力が特になくアジアでも ASEAN を中心に調和化の努力が行われています。



タイ教育省高等教育委員会チャンタビット事務次長へのインタビュー

### 次は「エリゼ条約」を軸にした単元化をめざして

山口県岩国市立愛宕小学校 松村 淳

10 年ぐらい前から、フランスとドイツの友好条約、エリゼ条約の教材化を図っています。

そもそもの発端は、大学の卒論で「ドゴールの政治的リーダーシップ」を取り上げたことでした。しかし、学生時代には、読めなかった書籍も多く、教職に就いてからも、趣味？で、フランスとドイツの戦後史の書籍を購入しては、読み漁ってきました。読み出すと、次から次へと関連書籍を発見するもので、次第に国際政治学や国際関係史の書籍にも手を出すようになりました。知的充足という快感はエンドレスで、現在も続いています。

さて、ある時、エリゼ条約成立の記述を読んだ際、これは教材化ができるかもしれないと感じました。

一見、小学校の学習内容にエリゼ条約を組み込めるようなものはないように思われたのですが、さまざまな要素から、授業化ができるように感じました。例えば、成立過程で、前々日までは条約レベルの話にはなっていなかったこと、条約内容の面で、政府と青少年の人事交流を義務づけるという特異な内容であること等が、授業時における場の設定としておもしろいと感じました。

以後、エリゼ条約は、小学 6 年生を担当するたびに、仕組んでいるのですが、一昨年度は、エリゼ条約（1 時間）とイラク戦争（1 時間）をリンクさせて実施しました。

ただ、あくまでエリゼ条約を含め、フランス・ドイツ関係（史）の事象は、それ自体の事実を知識として習得するというよりも、今住んでいる日本の状況を把握したり、またその足がかりを作ったりすることに活用する目的で実施しています。

今後は、アルザス・ロレーヌ（エルザス・ロートリンゲン）、短編「最後の授業」、共通歴史教科書等をデフォルメするといった教材の加工をしていくことで、フランス・ドイツ関係（史）の小学生レベルでの単元化を図っていきたいと考えています。



イラク戦争を取り上げた授業にて

## 自信や誇りにつながる国際理解教育

東京都江東区立東雲小学校長 手島 利夫

本校は平成15年度から国際理解教育に取り組んできました。その発展として、平成18年度からユネスコ・スクールに参加し、ESDの視点から教育実践を進めてまいりました。

研究の進展に伴って、国内外から様々な方が訪問してくださるようになりました。ドイツユネスコ国内委員会事務総長のローランド・ベルネッカーさんや、フランスにあるユネスコ本部のESD担当部長マーク・リッチモンドさんまで来校してくださいました。

この6月には、国際交流基金を通じて、アジア・オセアニアの14カ国から、環境や環境教育に携わる若手リーダー54名の訪問をいただきました。

総合的な学習を中心に、教育課程全体を通して進めるESDの実践やその理念について説明し、休憩を挟んで6年生の歓迎セレモニーとして、運動会で取り組んだばかりの「東雲ソーラン」を披露させていただきました。多くのお客様に「ブラボー!」「素晴らしい!」と大絶賛され、本当に嬉しそうでした。

また、当日3年生が取り組んでいた「ヤゴ救出作戦」の様子を参観していただきました。

ヤゴ救出作戦は、5年前から始め、江東区のネイチャー・リーダーの方々にご指導いただきながら取り組んできました。この日も、5名の方々に来ていただき、ヤゴのすくい方や見分け方、飼育の仕方等、一緒にプールに入り、手を取って教えていただきました。世代を超えて人とふれあい、一緒に環境の豊かさに気づく活動は、児童にとって楽しく貴重なひとときでした。

3年生にとっても、6年生にとっても、自分たちの学びに自信と誇りを感じる貴重な体験になりました。



ヤゴ救出作戦を参観するアジア・オセアニアの14カ国の環境リーダー児童たちにとっても貴重な体験となったESDの実践

## 博物館アウトリーチ教材の開発と実践

奈良県香芝市立鎌田小学校 山田 幸生



マレーシアで「日本版みんぱく」を実践する筆者

2007年度に私は4年生の担任となり、総合的な学習の時間において国際理解をテーマに取組を進め、子どもたちはそれぞれの視点から世界を調べた。しかし、学習を進めるにつれ、「世界のことも大切だが、日本のことをまずしっかりと勉強する必要があるのでは」という子どもたちの思いが大きくなり、本取組が始まった。

日本文化を紹介する「日本版みんぱく」には、子どもたちの思いが詰め込まれた。そして、マレーシアという交流国が見つかり、相手国の子どもたちを意識しながら、さまざまな思いをめぐらせてモノを選んだり解説ラベルを作ったりした。完成後、担任の私がマレーシアに「日本版みんぱく」を直接持参することになったが、現地での実践・調査では、どのような評価が得られるのか、子どもたちと同じように私の気持ちも高ぶったことを覚えている。

マレーシアでは、とてもフレンドリーな子どもたちが待っていた。そして、私が「日本版みんぱく」を説明した後、直接モノに触れて体験してもらったが、現地の小学生たちは、日本の文化を違和感無く受け入れ、モノを手に取り日本を感じていた。帰国後、子どもたちにその様子を伝えましたが、再考しさらによくしようという意見が出され、「新日本版みんぱく」へとつながっていった。

今回の取組では、マレーシアの人々が日本をはじめとしたさまざまな異文化を受け入れていることを知り、他国の人々と接する機会が少ない日本の子どもたちにとっては大きな刺激となった。そこから、「自分たちも他国の文化のことをもっと勉強したい」という気持ちが生まれ、異文化理解への主体的な学びとなったことは大きな成果であるといえる。

最後に、「みんぱく」をきっかけにして、ここまで取組が広がったこと、ならびに、本学会の学会員となり様々な研究発表を聞かせていただくことができ、国際理解教育に対する視点が大きく広がったことに対して感謝したい。



## 地域の身近なハンズオン教材の リソースセンター

桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト  
アウトリーチ教育コーディネーター 岩本 貴永



収集した世界の民族服を着る学生たち

私は桜美林草の根国際理解教育支援プロジェクト（通称：草の根プロジェクト）でコーディネーターとして働いています。草の根プロジェクトは桜美林大学の地域貢献活動の一環として、主に東京都町田市、神奈川県相模原市を中心とした地域における国際理解・多文化共生を目指した教育活動を、私たちが持つ教育リソースを活用して支援しています。今回は草の根プロジェクトが保有する教育リソースの一つである世界から集めた実物資料の活用についてご紹介します。

草の根プロジェクトは民博等の大きな博物館のように現地調査を通じた収集活動はできませんが、草の根プロジェクトの活動に携わる教員・学生の地道で熱心な努力により衣服、生活道具、楽器、遊び道具など世界各国の手に入る限りあらゆる分野の実物資料を少しずつ収集しています。収集した資料は地域の教育活動においてハンズオンで利用可能な教材として公開しております。草の根プロジェクトの資料は、国や地域別に、あるいはテーマ別に分類され、利用者の要望に応じて貸出しを行います。貸出しの際には興味のある資料を自由に手に取って確認し、目的に合ったものを選び、ニーズに応じて組み合わせた「異文化発見キット」として利用することができます。利用者は小中学校の先生方が多く、留学生を交えた交流活動や、世界各国についての調べ学習、「スーホの白い馬」など外国に関連した国語の単元でよく利用されています。

これらの実物資料はただ貸出されるのを待つだけではありません。近隣の小学校で児童向けに草の根プロジェクトが実施する教育活動では、児童が実物資料に楽しみながら直接触れて体験する教育プログラムを学生がファシリテーターとなって行っています。また、昨年の12月からは小さな展示スペースを用意した「異文化発見ハンズオン・ギャラリー」として公開し、小中学校からの見学も受けれています。

## 国際理解教育を改めて考える —二つの個人的な契機から—

立命館大学・京都連合教職大学院 森田 真樹

この数年、国際理解教育を改めて見つめなおす二つの契機があった。

一つは、2006年9月から1年間、在外研究のため、サンフランシスコ近郊に滞在したことである。米国は何度も訪れているが、家族同伴での滞在は初めてである。日本人・日系人の多い地域であったこともあろうが、大きな困難に直面することなく生活することができた。インターネットをつなげば様々な情報がリアルタイムで入手できる。日系の諸団体による盆踊り大会や新年会も開かれている。街中は、まさに多文化社会であり、様々な人々が、当たり前のように生活し、交流している様を目の当たりにするし、隣家の人々は、私たちに普通に接してくれる。

日々の生活を通して、国際理解教育について様々な角度から考える機会があった。国際化が叫ばれて久しい日本であるが、海外に目を開くことに留まらず、日本社会（日本人）が、他国・他文化の人々に真に開かれ、他国の人々から信頼される存在となるために、国際理解教育が果たすべき役割とは何かについて、改めて考える契機となった。

二つは、2008年4月から、京都連合教職大学院において、国際理解教育関係の講義を担当することになったことである。教職大学院だけに、高い意識をもった学部卒院生と現職院生に囲まれながら講義を行っているが、国際理解教育を学部時代や研修等で学んだ経験がある院生が少ないこともあって、将来の実践者に対して伝えるべきこととは何かについて、改めて考える毎日である。

国際理解教育を実践する力量は、これからの教員にとっては必要不可欠のものとなろう。

しかし、実践者に必要となる基本的知識や技能、資質とは何かと問われれば、明確な回答を見出すことは容易ではない。全国共通の内容基準もなく、教員免許取得のための必修領域でもないからこそ、「国際理解教育を担う教員の養成のあり方」という難しい課題の追求が不可欠ではないかと感じる日々である。



サンフランシスコ・ダウンタウンでの盆踊り

## 『独仏共通歴史教科書』は どのように使われているか

大阪府立三島高等学校 松井 克行

現在、日韓や日中韓で共通歴史参考書が「副読本」として作成・使用されている。だが、「共通歴史教科書」の作成段階には至っていない。残された課題が多々ある。だが、独仏はこの困難を克服し、2006年度より『独仏共通歴史教科書』を作成・使用している〔現在、「現代編」、「近代編」が出版。「古代～中世編」は来秋出版予定〕。両国の負の歴史についても多面的な視点から積極的に記述している。

では「実際に、どのように使われているか?」、この疑問を解く為に独仏を訪問した。大半の学校が夏休みの中、独バイエルン州ミュンヘン市の高校で「アビ・バック（アビトゥーア・バカロレア）学級」（独仏の高校卒業資格が得られる特別学級）の授業を見学できた。

仏版『独仏共通歴史教科書』を使用した外国語（仏語）による世界史の授業であり、教員が学習内容を写真で紹介した頁を活用し、生徒に写真を説明させていたのが印象的だった。授業後、生徒達から、効果的な写真を用いた構成が、文書資料の多い独教科書とは異なり新鮮で面白い、という意見を得た。その後の調査で教科書構成は、フランスの影響によることが明らかになった。さらに独側の取材では、「来秋、全巻出版されれば、『アビ・バック学級』以外的一般学級でも本教科書の普及が進む。」という意見が多かった。

他方、仏側の取材では、「一般学級での普及は進まない。教員用参考書でよい。」等の厳しい主張も見られた。その理由は、独側が画期的と評価する教科書構成が仏側では一般的なこと。本教科書に見られる、生徒の自由で多様な意見を重視する質問項目が、教員主導の仏流の授業スタイルにはそぐわないこと、仏の大学入学資格試験であるバカロレアの対策に不向きとの見方が強いこと等である。

渡欧に際し、公私両面で御支援を賜った静岡県立大学の剣持久木先生、共立女子大学の西山曉義先生を始めとする関係者の皆様に心から感謝申し上げる次第である。



「アビ・バック学級」での授業  
(独バイエルン州ミュンヘン市のダンテ・ギムナジウム)

## エチオピアとタンザニアでの研修

同志社中学校 織田 雪江

これまで実践してきたチョコレートやバナナなどを素材にした教材の足りない部分を補いながら積み重ねていけるような教材と、学習指導要領の改訂によって中学地理的分野に復活するアフリカの地域学習のための教材をつくりたいという思いから、この研修制度に応募した。こうした機会を与えて下さった本学会と公文国際奨学財団に心からお礼を申し上げたい。

昨年12月に生まれて初めて訪れたアフリカは、砂埃の舞う乾季のエチオピア・ファンターレ郡だった。今回は雨季を迎えていたにもかかわらず、カラユ牧畜民の暮らす同地域は依然として乾燥が厳しかった。彼らを支援するGTFというNGOとその支援地域をいくつか訪問するとともに、彼らの生活圏を奪ったとされていた国営のさとうきび農園やアワシュ国立公園も訪ねた。後者は驚くほど緑豊かで広く、特に国立公園では観光者としてその利点も感じ、対立する人々の葛藤からも学ぶことができるという思いを強くした。

また、フェアトレードに関心を持って以来ずっと訪ねてみたかったタンザニアのルカニ村は、きれいに掃き整えられた赤土の道と、ピンクのプーゲンビリアが混じる生垣も美しく、豊かな農村に見えた。フェアトレードコーヒーはバナナや豆など複数の植物とともに家畜の堆肥で育てられ、環境保全にも優れていた。そして、それまでPrimary Schoolしかなかった村にあって、建設中のSecondary Schoolで生徒が学習する様子は、教育環境の前進を感じるのに十分だった。それでも聴き取りを始めてみると、300人余りの生徒に対して資格のある教員が校長先生だけだったり、1年に2000円程度の授業料を払えずに学校をやめる生徒が複数いるなどの現実を知ることとなった。また、カラユ牧畜民同様、ルカニ村の農民も気候変動の影響を大きく受けていた。

以上のように現場を訪れて学んだことを生かしながら、批判的に、そして創造的で建設的な思考を養えるような教材を考えていけたらと思う。



建設中のルカニ村のSecondary Schoolで  
学ぶ生徒たち (タンザニア)

## お知らせ－これからの行事／イベント案内－

### 日本国際理解教育学会「ESDと学校教育」実践研修会 ESD授業デザインプロジェクト公開研究会 in 名古屋

- 日 時：2009年10月31日（土）午後1時30分より
- 話題提供：多田 孝志（目白大学教授、日本国際理解教育学会会長）ほか小学校・中学校などから
- ファシリテーター：伊沢 令子（NIED・国際理解教育センター）
- 内 容：小学校外国語活動におけるESD・国際理解教育の視点をさぐる
- 場 所：東海学園大学名古屋キャンパス（4号館・420教室）
- 対 象：教育関係者 ●主 催：日本国際理解教育学会 ●共 催：ESD学校教育研究会
- 協 力：EPO中部、中部環境パートナーシップオフィス、NIED・国際理解教育センター
- 後 援：愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会 ●参加費：無料
- 問 合 せ：東海学園大学名古屋キャンパス 浅川 和也（大学 052-801-1201、研究室 801-6721、e-mail: kasan@mac.com）

### 第10回韓国国際理解教育学会のご案内

第10回を迎えた韓国国際理解教育学会の研究大会が下記の予定で開催されます。例年、日本から10名以上の参加者があり、研究発表やシンポジウムでは、熱い討議が繰り返されています。また、日韓の友情を深める場にもなっています。

なお、自由研究発表をご希望の方は、タイトルを添えて、学会事務局まで至急ご連絡ください。発表をご希望の方には、後日、発表抄録、発表時間など詳細をお知らせいたします。また、発表時には例年、韓国語の通訳がついています。

- 日 程：2009年11月14日（土）・15日（日）  
14日（土）午前：自由研究発表 午後：記念式典、国際シンポジウム  
15日（日）午後：ワークショップ「国際理解教育の指導方法とその実践」

- 会 場：梨花女子大（ソウル）
- 主 催：韓国国際理解教育学会

経費及び渡航手続き：渡航、宿舎に関しては原則として各自手配をお願いします。大会参加費は韓国学会の負担の予定ですが、その他は自己負担です。また、韓国の学会から詳細な情報が届いておりませんが、参加希望者には分かり次第情報をお届けいたします。

### 研究大会等のお知らせ

#### ◆日本国際理解教育学会 公開研究会

「グローバル時代のシティズンシップと国際理解教育」

- 日 時：2009年12月12日（土）午前10時～正午 ●場 所：中央大学 駿河台記念館
- 内 容：グローバル時代のシティズンシップの解明を軸とした、これからの国際理解教育の在り方についての研究
- 報 告 者：岡崎裕（プール学院大学）、小関一也（常磐大学）、桐谷正信（埼玉大学）、中山あおい（大阪教育大学）
- 司 会：宇土泰寛（椋山女学院大学）、嶺井明子（筑波大学）

※詳細は、学会HP（<http://www.kokusairikai.com/>）でお知らせする予定です。

#### ◆2010年度（平成22年度）第20回研究大会

- 開催日時：2010年7月3日（土）～4日（日） ●開催会場：聖心女子大学
- 実行委員長：永田佳之（聖心女子大学）

#### ◆学会ホームページのご案内

研究大会やワークショップなどの情報をご覧いただけます。アドレスは次のとおりです。<http://www.kokusairikai.com/>

#### ◆年会費納入のお願い

当学会の活動は会員の皆様の会費でまかなわれております。今年度までの年会費未納の会員は至急会費をお支払いください。よろしくお願いいたします。なお、本年度は理事選挙の年になっております。あわせてお知らせいたします。

- 会 費：正会員8,000円 学生会員4,000円 団体会員30,000円
- 郵便振り込み：口座番号 00120-5-601555 加入者名 日本国際理解教育学会

#### ◆紀要『国際理解教育』の購入手続きについて

現在、第1号を除き、最新の15号までの在庫がございますが、在庫が僅少の号も出始めております。学会ホームページにバックナンバーの総目次が掲載されています。

ご希望の号数および冊数をファックス（03-5996-3125）またはEメール（[kokusai@mejiro.ac.jp](mailto:kokusai@mejiro.ac.jp)）で事務局までお知らせください。振り込み用紙をお送りいたします。なお、会員の皆様には、会員価格でお求めいただけます。

# 事務局通信

## 新入会員

以下の31名の方が平成21年7月26日までに入会を承認されました

氏名	所属	氏名	所属
服部 由起	筑波大学大学院	村田 京子	千葉市立打瀬中学校
野畑 理佳	国際交流基金 関西国際センター	今井 寿枝	国際交流基金 関西国際センター
品川 直美	国際交流基金日本語試験センター	宮野 祥子	早稲田大学大学院
高橋 博代	千葉大学教育学部附属中学校	佃 繁	プール学院大学
柳田 由佳	聖心女子大学	牧野 あゆみ	東京ゆりかご幼稚園
吉成 佑美	上越教育大学大学院	小林 和平	上越教育大学大学院
山田 幸生	香芝市立鎌田小学校	山田 美知子	
松村 淳	岩国市立愛宕小学校	河野 秀樹	目白大学
松本 祐子	早稲田大学	本田 容子	目白大学
遠藤 沙織	北海道教育大学大学院	林 加奈子	桜美林大学
長谷川 典子	北星学園大学	阿部 一郎	(財)自治体国際化協会
小川 修平	中央大学大学院	今枝 明子	愛知大学
吉田 敦彦	大阪府立大学	久保 哲成	兵庫県立伊川谷高等学校
津山 直樹	中央大学大学院	瀨瀬 好子	京田辺シュタイナー学校
岩本 泰	東海大学	泉谷 道子	愛媛大学
日比野 正明	環太平洋大学		

### <お詫び>

「日本国際理解教育学会会報」平成21年3月31日発行に記載の大会自由研究発表者（敬称略）と題目欄において、50.石川洋一（実践女子大学）となっておりますが、正しくは石川祥一（会員）の誤記載でした。お詫び申し上げます。

### <寄贈図書>

- 中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志 編著『学校と博物館でつくる国際理解教育—新しい学びをデザインする 国立民族学博物館共同研究—』明石書店、2009年

### <事務局からの連絡とお願い>

#### ◆会員の図書・文献寄贈のお願い

会員の皆様の間われました文献・図書・報告書・教材など、また、会員の所属する学校での紀要等がございましたら、学会にご寄贈ください。その際、助成金をいただいております公文国際奨学財団にも送らせていただきますので、できましたら2部お送りください。

#### ◆住所・所属等変更連絡のご協力をお願いします

事務局からの郵送物が「転居先不明」で返送され、また、会員のみなさまへのご連絡が滞ってしまっている場合が少なからずあります。所属変更によるお引越など住所・所属等に変更がありましたら、ファックス（03-5996-3125）または、Eメール（kokusai@mejiro.ac.jp）でお知らせください。また、会員種の変更もお知らせください。

#### ◆ニューズレター投稿のお願い

ニューズレターでは、ひろく会員の皆様の活動をご紹介するために「会員だより」の欄を設けています。「会員だより」では、以下の条件で、会員の投稿をお願いしています。

- 内 容：現在の研究テーマや活動、国際理解教育に関する考えについて
- 分 量：本文800字以内、写真（JPEG形式、デジカメ写真）1枚  
投稿をご希望する場合は、お名前、所属を明記の上、事前に以下の連絡先までメールでお知らせください。あらためて執筆のご依頼をさせていただきます。投稿希望者が多数の場合には、調整させていただきます。
- 連絡先：田尻 信壹（富山大学） stajiri@edu.u-toyama.ac.jp